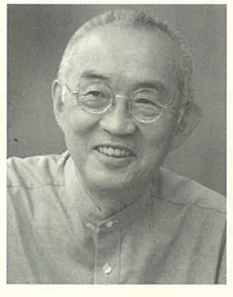
100年先を読む—㉛

節約精神が文明の贅肉を削除する

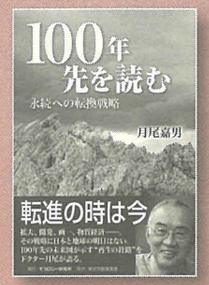
東京大学名誉教授
月尾嘉男（つきおよしお）



秘境の民族の自産自消生活

本年二月、南米大陸にある世界最大の流域面積をもつ大河アマゾンの源流地域へ出掛けた。日本から片道で丸三日間かかる秘境に生活している先住民族マチゲンガの人々を訪問し、その生活から現在の世界を見直すという趣旨のテレビジョン番組を制作する目的である。地域は河口から五〇〇〇キロメートルの上流であるが、川幅が約五キロメートルもあり、数千トン規模の汽船が往来するという、日本とは桁違いの雄大な環境である。

奥地の都市から陸路と水路を一四時間行進し、密林で親子四人が生活する小屋に到達する。極端な高温多湿の環境に対応する壁面のない高床住居は周囲の木材で手作り、衣服は綿花から自製、イモ以外の食料は野生の動物や魚類、燃料は木材で、文明の気配は鍋釜だけという完全な自産自消である。それ以上に重要な特徴は、衣類は伝統衣装が一人二着だけ、密林でも裸足であるから履物はゼロ、食料も燃料も備蓄ゼロという無駄のない生活である。



絶賛発売中!!
詳細は53頁をご覧ください。
ご注文は巻末ハガキで

48頁に講演要旨を収録しています。あわせてお読みください

文明社会に付随する贅肉

アマゾンの源流地域に比較すれば一〇〇〇倍以上にもなる人口密度の日本で自産自消は無理であるが、その文明社会に生活する人間の周囲には、一年に一回着用するかどうかも疑問な大量の衣装や履物、いずれは賞味期限がきて廃棄する運命にある豊富な食品、総世帯数の一・二倍にもなる住宅が存在し、人通りのない道路の照明、わずかな視聴者数にもかかわらず放送される深夜番組など、秘境とは対極にある生活が氾濫している。

その秘境の住人が小屋の周囲にある喬木からクリのような果実を採取してご馳走してくれたとき、日本にもあるかと質問する。何百キロメートルの彼方から輸送してきた果実を購入していると説明したが、まったく理解できないようであった。現今の文明社会では、このような無駄こそが贅沢もしくは豊穣の象徴と錯覚されてきたが、先住民族の視点から判断すれば文明が長年にわたって蓄積してきた贅肉でしかない。

贅肉を削除する節約の精神

人間にとって贅肉が健康阻害の要因であるように、社会における贅肉も鉱物資源の枯渇、森林面積の減少、大気温度の上昇など地球規模の問題の原因となっている。解決の第一の方法は技術や制度による対応である。一例として、原子力発電所の停止による電力不足を解消するため、太陽発電や風力発電による電気を、電力会社が現状の発電価格の何倍もする価格で購入して普及させる制度が実施されることになった事例がある。

これは一見妥当な解決方法のようであるが、いくつか問題がある。既存価格より高価に購入するということは当然、電力価格の値上がりに反映する。食料ほどではないにしても、現代生活に必須の資源の値上がりは逆累進性、すなわち貧富に関係なく同一の料金負担をすることになる。さらなる問題は代替電源で電力を供給するということは、社会が必要とする電力という資源を依然として要求されるがままに供給するということである。

これは贅肉の原因である飽食を放置したまま、人々が要求する食料を供給しつづけることに相当する。その結果、アメリカでは一日に廃棄される食料は約一三〇億円である一方、肥満治療の医療費用は一日に約二六〇億円という事態が発生している。健全な方策とはいえない。そこで期待されるのが第二の方法、節約である。昨夏は東京電力管内で約一五%が不足するとされたにもかかわらず、約一八%の節電によって問題は解決された。

産業分野の操業短縮などが多大に貢献しているが、家庭でも相応の努力をした成果である。これは前述の視点からすれば、現代社会の贅肉を節約という精神活動によって削除したことに相当する。食料のみならず、電力も資源も節約すれば、個人の肉体も社会の体制も贅肉を削減した健全な状態に回帰する。それは古代ローマの詩人デキムス・ユニウス・ユウェナリスの言葉「健全な肉体と健全な精神」の関係に回帰することでもある。